

市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習を
推進するための社会教育の役割

建 議

平成30年9月

昭島市社会教育委員会議

目次

はじめに	1
第1 昭島市の生涯学習推進計画について.....	2
1. 昭島市生涯学習推進計画について.....	2
2. 第2次推進計画の基本目標について.....	2
第2 第2次推進計画の中間評価について.....	3
1. 諮問と答申	3
第3 第2次推進計画の後期に向けた取組みの評価について.....	3
1. 評価の視点	3
2. 検証の方法	4
3. 検証の結果	4
4. 全体の評価	7
第4 市民の声・ニーズを活かすための取組みについて.....	8
1. 茨城県ひたちなか市社会教育委員の会議の実践事例（視察研修）	8
2. 昭島市社会教育委員会会議の実践事例（ワークショップ）	8
第5 後期に向けた取組みについて～捉える、活かす、つなげるための提言～.....	13
1. 捉える、活かす、つなげるための提言.....	13
2. 新たな取組みについて.....	14
おわりに	15

はじめに

平成 27 年 9 月に教育長から諮問のあった「あきしま学びぷらん（第 2 次昭島市生涯学習推進計画）の中間評価について」に対し、昭島市社会教育委員会議は、「答申の根底にある理念は、『まちづくり』である。」として中間評価を行った。そして、より一層推進していくための仕組みや取組みについて提言をしたが、その中で、社会教育委員会議が引き続き進捗状況の検証・評価を行うこととした。

そこで、今期の社会教育委員会議では、「あきしま学びぷらん（第 2 次昭島市生涯学習推進計画）」の後期に向けた取組みについて、評価方法を策定して調査を実施した。調査・研究にあたっては、社会教育委員が積極的に市民の声・ニーズを収集し、活動に反映させるなどの取組みを行っている、茨城県ひたちなか市への視察研修を行った。また、当市の生涯学習部社会教育課との連携により「市民ニーズを活かす・つなげる あきしま会議」を開催して市民の声を聴く機会を設け、併せて、様々な活動をしている市民グループをつなげる試みを行った。

ここに、「あきしま学びぷらん（第 2 次昭島市生涯学習推進計画）」の後期に向けた取組みについての評価と本計画の基本目標である「市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習」をより一層推進するための取組みについて提言する。

この提言が、昭島市が目指す生涯学習の推進に寄与することを願うものである。

第1 昭島市の生涯学習推進計画について

1. 昭島市生涯学習推進計画について

昭島市の生涯学習推進計画は、昭島市生涯学習基本構想審議会の「市民としての意識と相互の『つながり』を強化し、また、「昭島に住む」という共通の基盤に立って、「つながり」を再生し、拡大する機能は「生涯学習」に最もふさわしい役割である」との答申を踏まえ、平成15年に昭島市生涯学習推進計画「ともにひらき、ともに創る、あきしま学びぷらん」として策定された。

その後、8年余りが経過し、第2次推進計画の策定にあたり昭島市社会教育委員会が諮問を受け、平成24年2月29日の答申を経て、平成25年3月に「あきしま学びぷらん（第2次昭島市生涯学習推進計画）」（以下、第2次推進計画）が策定された。

2. 第2次推進計画の基本目標について

第2次推進計画の基本目標は、第五次昭島市総合基本計画における、生涯学習施策のめざす姿である「誰もが、自分の意思で自由に学ぶことができる環境が整い、地域のつながりときずなを実感し、豊かな人生をおくっています。」を基本理念に、「市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習」としている。具体的目標として、（1）「学び」の基礎をつくる （2）「学び」の場を確保する （3）「学び」の機会を提供する （4）「学び」を支援する の4項目が掲げられ、この中で使われている「学び」という言葉について、第2次推進計画の中で次のように記されている。

「学び」とは

ここでいう「学び」とは「生涯学習」そのもののことをいいます。「生涯学習」が生涯にわたる学習であり、生活の中の学習であり、さらに活動することで学び合うコミュニティが形成されていくこと、地域の「きずな」が培われることすべてを包括しています。

生涯学習は「楽しい」ものであることが大切です。「学び」のもつ「楽しさ」を味わうことが「学び」の継続につながっていきます。

「学び」の「楽しさ」は、まず自身が自分の向上を実感できること、そして、手に手を組んで協力することの楽しさを味わうこと、人と関わる活動が面白いと感じること、やりがいを感じることです。「学び」の「楽しさ」から、だれもが心豊かで充実した生活を送り、それが地域の「きずな」や活性化への導きとなることこそ、本市で推進しようとしている生涯学習であるといえます。

これは、第28期昭島市社会教育委員会議による答申「あきしま学びぷらん（第2次昭島市生涯学習推進計画）の中間評価について」（平成28年9月）で述べた「学んで終わり」といった生涯学習ではなく、市民一人ひとりがまちづくりの当事者となっていくことをめざすうえで大切な要素であると考えます。

第2 第2次推進計画の中間評価について

1. 諮問と答申

社会教育委員会議では、平成27年9月、教育長から諮問のあった第2次推進計画の中間評価にあたり、生涯学習、社会教育に関連する事業を実施している23の部署に対して、自己評価を依頼して取組み状況を把握し、委員相互に意見を出し合いながら検証を行い、その結果を踏まえて4段階で評価を行い、中間評価としてその内容を取りまとめた。

答申では、各部署が行った自己評価から見てきた現状と課題、中間評価の内容に加え、社会教育委員会議が第三者機関として継続的に「学習者の意識の変化や地域への効果など」について、評価を行っていくことを記載した。

第3 第2次推進計画の後期に向けた取組みの評価について

1. 評価の視点

上記の諮問においては、事業を実施している部署に依頼した自己評価を基にして、社会教育委員会議が評価を行ったが、後期に向けた取組みに対する評価は、社会教育委員が直接評価することとした。

そのために、社会教育委員が相互に意見を出し合い、評価の視点を「捉える」「活かす」「つなげる」という3点に絞った。

(1) 捉える

- ・事業がどのようなニーズに基づいて、どのような発案だったか等、企画の過程が分かるか。
- ・どういうニーズを反映させようとしたのか。
- ・市民のニーズがどのくらい反映されて企画されているか
- ・担当部署が市民ニーズをどう反映しようとしているのか。
- ・市民意識調査の結果は反映されているのか。
- ・事業の成功例や失敗例から共通した課題を探ることができるか。
- ・参加の動機や満足度など、参加者の評価が伝わっているか。

(2) 活かす

- ・企画の段階でどの程度市民が関わったのか。
- ・市民ニーズをどう収集して、反映したのか。
- ・事業の内容が時代にマッチしているか。新たなニーズに対して、講座を入れ替える等の検討がなされているのか。
- ・事業の内容はある程度の期間で見直しや整理が必要だと思うが、その点についてどうしているのか。

(3) つなげる

- ・参加者が続けていけるように考えられているのか。事業の継続性があるのか。事業終了後にフォローアップされているか。
- ・事業をきっかけに地域に根付いたものがあるか。
- ・発展や成果があったのか。社会貢献できている成果が見られるか。
- ・全体的な効果だけではなく、部分的な効果についてもみられるか。

2. 検証の方法

調査の対象は、市民や地域への波及効果が期待される 9 部署 26 の事業担当部署とした。調査を行うにあたり、調査内容をとおして社会教育委員会が何を大切に思っているのかを伝える手段として、また、第 2 次推進計画の後期に向けた取組みにつながる提案になるよう、2 種類の「実施事業に関する調査シート」を準備した。（資料 1）

【調査シート 1】

市民のニーズに関すること、参加者数の推移、市民・地域への波及効果等を記載するもの

【調査シート 2】

平成 28 年度に実施した事業の成果に対する自己評価を記載するもの

本調査の回答を集約し、実施事業における市民ニーズの収集方法や企画への反映方法などを把握した。さらに、参加者が記入したアンケートの直接分析を行なったのち、先にも述べた「捉える」「活かす」「つなげる」を視点に、各事業について検証を行った。

3. 検証の結果

(1) 市民会館・公民館の事業について

「市民大学」は、60 歳代以上の参加者が多く、定年を迎えた方々の受け入れ先にもなっており、相応のニーズがあるものと思われる。ただ、受講後の市民への還元という点で、本来の目的が期待している「つながり」に結びついていると言いきれない面がうかがえる。

「障害のある青年の交流講座」は、一緒に活動するボランティアの確保に苦慮していることがわかる。

(2) 社会教育課の事業について

「生涯学習サポーター養成講座」と「子ども会世話人研修会」は、いわゆるス

キルなどを学ぶ内容ではなく、社会教育を支える人を育てることを目的に実施されていることがわかる。市民のニーズというよりは、行政からの働きかけという意味合いが強く、市民ニーズの集約方法や企画等への反映がどのように行われたのかが、確認できなかった。

「生涯学習サポーター養成講座」については、生涯学習サポーターに求めている役割が具体的にどのようなものなのか、生涯学習サポーターとして活躍する人はどのような人なのかという全体像が見えにくい。ただ、参加者の中から「昭島生涯学習サポーターの会まなぶん」もできており、行政との協働体制が徐々に構築されつつあるので、そのつながりを活かすための方策が必要である。

「子ども会世話人研修会」は、毎年変わる世話人にとって、研修会への参加が負担感になっていることが懸念される。子ども会は地域のつながりをつくる役割を持つものと捉えることができるが、現在減少の一途をたどっており、すでに子ども会が存在しない地域もある。地域のつながりを育む・創るうえで、今後社会教育的側面からの方策も必要であるといえる。

その他「社会教育・地域活動に携わる方々のための研修会」は、定員に満たないことが多い。「団体活動ステップアップ研修（パソコン講習会）」と「中高年のためのパソコン講習会」は、定員を超える参加があり、相応のニーズがあることがわかる。

これらの事業について検証した際、市民のニーズを把握し、即効性のある内容にするなど工夫が必要ではないかという意見も出たが、果たして、表面的なニーズに応えることだけが大事なのだろうかという疑問も残った。

(3) 市民図書館の事業について

「はじめての読み聞かせ講座」では、「これからつながりを探していきたい」などといったつながりを求める声も認められたが、参加者同士が交流したり、発表する場が確保されているかなど、事業終了後の状況を確認することができなかった。

(4) スポーツ振興課の事業について

様々なスポーツ教室などの事業があり、それらは概ね市民のニーズに応えた内容だと思われる。恒例行事ともなっている新春駅伝や歩け歩け大会などは、参加者が増加傾向にあるが、一方で、「親子ふれあいスポーツデー」など一部の事業では減少傾向が認められた。その課題の解決策について情報を得る必要がある。

市民プールについては、来場者の減少が認められたが、駐車場が使用できなくなったことが若干影響してのことで、施設的な問題と考えられる。

(5) 生活コミュニティ課の事業について

「消費生活講座」では、様々な内容で事業を展開しているが、定員に満たない講座の内容について、参加者を増やすことが課題である。参加者からは概ね好評を得られているので、参加者を多く得る工夫が必要である。また、開催する一つひとつの内容について、対象者が参加しやすいのかなどを考えて内容を検討する必要がある。

(6) 子ども育成課の事業について

「昭島市リーダーズクラブ」は、中学生リーダー講習会の修了者を対象としているが、事業への参加者が少ない状況にある。また、市民ニーズの収集方法の問いに「小学生を対象にレクリエーションや野外活動の指導補助」とあるが、事業の達成目標である「地域のリーダーになること」を踏まえるならば、もう少し地域の課題に取り組むような内容になってもいいように感じられる。ただ、中学校の部活動との兼ね合いがあり、中学生がこのような活動に参加しにくいということも十分考えられる。

「子どもと親の家庭教育講座」は、開催数が激減している。その理由として、これまで多かったPTAとの共催について、最近ではPTAが主体となること自体が難しくなっているのではないかと考えられる。

「子育て仲間づくり『くじらっこ』」は、利用者のアンケートに基づいて対象者を変更するなど、市民ニーズに沿った工夫が見られ、参加者も増えている。

今後は、子育てに関する情報を得られない市民に向けても、情報を届ける方法を考えていけると、さらなる発展が期待される。

(7) 環境課の事業について

「夏休みの親子多摩川源流体験」は、参加希望者が定員を超えているので、市民のニーズもあると思われる。今後は体験者が新規の参加者へのサポーターになるなど定員を増やす工夫が期待される。

(8) 産業活性課の事業について

「親子米作り農業体験教室」は、定員を20組としているが、年々希望者が増加しており最大29組を受け入れている。アンケートでの評価も高く、市民のニーズもあることが評価できる。

(9) 介護福祉課の事業について

「傾聴ボランティア講座」「認知症サポーター養成講座」については、少子高齢化時代のニーズに合ったもので、需要が多いと推測されるが、「傾聴ボランテ

「傾聴ボランティア講座」は定員に満たない。一方、「認知症サポーター養成講座」は年々増加傾向にある。

「傾聴ボランティア講座」では、高齢者等が話し相手を求めているとのことだが、このようなボランティアだけでなく、民生委員や社会福祉協議会の主催するサロンなど他の組織もあるので、重なる部分の問題や課題が確認できなかった。

「認知症サポーター養成講座」では、自治会や学校等への周知を検討しているとのことなので、昭島市の自治会連合会と連携してシニアクラブなど高齢者を対象とした団体について調査し、周知方法を検討する必要があることが確認された。

4. 全体の評価

「捉える」「活かす」「つなげる」の3つの視点で検証した各々の事業は上記3のとおりであるが、全体として次の状況が認められた。

(1) 「捉える」について

参加希望者が定員を超えるなど市民ニーズに応えた内容で事業が行われていたり、参加者のアンケートに基づいて対象者を変更するなど市民ニーズを反映した事業が見られたが、一方で、市民ニーズの集約方法や事業への反映をどのように行われたのかについて確認できない事業があった。また、参加者が少ない要因についての情報収集やその分析、対応が十分とはいえない事業も見られた。

(2) 「活かす」について

「社会教育を支える人を育てること」「地域のつながりを作る役割をもつこと」など、事業の目的が明確となっているものが認められたが、中には参加者に求められる役割が明確でなかった事業があった。

また、参加者にとって参加しやすいかなどの内容の検討や達成目標も深められるように工夫した方が良い事業もあった。

さらに、情報が得られない市民への対応も考慮するなど、情報提供の方法についても挙げられた。

(3) 「つなげる」について

参加者により昭島生涯学習サポーターの会「まなぶん」が発足するなど、行政と協働体制が構築されつつある状況や「つながり」を求める声が認められるが、一方で、本来の目的である「つながり」に結びついていないと見られる状況が散見された。また、参加者同士の交流や受講後の様子を確認することができない事業もあった。

この検証をとおして、委員相互の間では、「表面的な即効性のあるスキルアップにつながるニーズに応えることだけが大切ではない」との認識に至り、社会教育委員としてできることは何かを検討することとした。

第4 市民の声・ニーズを活かすための取組みについて

1. 茨城県ひたちなか市社会教育委員の会議の実践事例（視察研修）

茨城県ひたちなか市社会教育委員の会議（以下、当会議）では、社会教育委員が積極的に市民の声・ニーズを聴いて活動に反映させているとのことから、社会教育委員会議では平成30年2月に視察研修を実施した。

当会議の実践事例は、次のとおりであった。

ひたちなか市の社会教育委員は「審議会の委員」として、4つの役務がある。

- ① 市民の声を行政に届ける
- ② 行政の事業などを市民に伝える
- ③ 市民に呼びかける（発言・発信）
- ④ ひたちなか市の現状を把握する

具体的には、「**現場で運営者に聴く**」こととして、講座や事業が行われているところに赴き、運営者等と面談して直接声を聴いている。また、「**現場を訪れる**」こととして、子ども会活動の現場や、NPOが運営している放課後子ども教室の事業を視察している。

そのほか、当会議が支援を行っている「高校生会」の代表を招いて学習会を開催し、支援している高校生から直接意見を聴く場（機会）を設けるほか、「高校生会」を担当している市の職員からも活動の様子などを聴取している。

当会議では、上記の取組みを年間の活動計画として実施している。

また、当会議の年間テーマを決めるにあたり、社会教育委員の選出団体等に対してアンケートを実施し、市民ニーズの収集に努め、団体等との連携を図ることとしている。

このように、当会議は、「社会教育委員は市民の代表である」ことを意識し、市民のもとへ出かけたり、高校生会の活動支援のために学校を訪れたりするなど、直接関わりを持つことを積極的に行い、その中から市民のニーズを捉え、課題解決や建議の作成に反映させていることがわかった。

2. 昭島市社会教育委員会議の実践事例（ワークショップ）

社会教育委員会議では、調査シートの検証やひたちなか市での視察研修を踏まえ、**表面に見えている市民ニーズに単に答えるのではなく、すでに活動している市民から直接ニーズを聴くことによって、より意義のある活動支援につなげていくことができる**と考え、市民の声を聴く（捉える）機会と市民相互がつながる機会として、「市民

のニーズを活かす・つなげる あきしま会議」(以下、あきしま会議)を開催した。

会議では、全体のファシリテーター(議事進行の口添え役)を早稲田大学等非常勤講師の近藤牧子氏にお願いし、市民と市内で活動している団体を対象として、小グループに分かれ、活動者の報告を軸に語り合う・聴き合う、ラウンドテーブルという手法を用いた。ラウンドテーブルでは、活動者が実際にやっていることを他者と共有し、さまざまな目線で議論し、活動の意味をより明確にしていく共同探究の場である。

会議では、参加者同士の対等な関係性を保証し、場の安心・安全の確保と他者理解を促すため次のようなルールがある。

- ① 協力して参加をする
- ② 話し合いの時間はみんなの時間
- ③ 言いたくないことは言わなくてよい
- ④ 主張はしても否定しない
- ⑤ 相手の話を聴いてみんなで共有

活動者の報告については、社会教育委員も含めた参加者に事前をお願いをした。当日の報告内容は次のとおりである。

ボーイスカウトの団委員会について
昭島生涯学習サポーターの会 まなぶん について
弓道教室について
劇団 Firstline について / テンダーハート昭島 TOKYO 体当たり について
地域文化の会
サークル杵柄(きねづか)
社会教育委員としての活動を振り返って / 小学校での土曜日補習教室について
多摩りばクラブについて
小中学校における茶道体験のあり方について
こどものサロンび〜の(福島町)

報告者には、事前に次の6つの項目を報告内容の中に盛り込んでもらうことにした。

- ① 団体(活動)の説明
- ② 関わっている人は、どんな人で、何人ぐらいか
- ③ 何を目的に活動しているのか
- ④ ここ最近実施したこと
- ⑤ 活動するグループの中で起こった(起こっている)、または感じた(感じる)「食い違い」(意見や、考え方)や「違和感」(うまくかみ合っていない違和感など)
- ⑥ この活動を通じて得ている、学び・発見、報告者自身の変化や周りの変化

あきしま会議の内容については、資料2のとおりである。

先述のとおり、あきしま会議は「市民の声を聴き（捉え）市民相互がつながる」場として開催したわけだが、参加者（20代から70代までの幅広い世代にわたった18名）からは、あきしま会議の目的に関する感想のほか、開催に関する感想として以下の回答が得られた。

（1）市民の声を聴く（捉える）ことについて

- ・他団体の悩みや問題を知ることができ、その解決方法のヒントが得られた。
- ・他の活動グループの実情を知る良い機会となった。
- ・いろいろな考え方もあることが分かり新鮮だった。
- ・名前は知っていても活動内容までは知らなかったもので、そんな活動もしているのだと新たな発見がたくさんあった。

（2）市民相互がつながることについて

- ・いろんなジャンルの方々と意見交換ができてよかった。
- ・お互いの課題を皆で協力して解決する姿勢が見えたので素晴らしかった。
- ・地域で活動している方々といかにつながるか、また、つながっていない人たちをいかに受け入れていくかを再考する機会になった。
- ・地域との関りを持ちたい。

（3）開催について

- ・報告者、聞き手ともに、ひとつの報告時間50分では短いと感じた。
- ・もっとたくさんの事例報告を聞きたかった。
- ・事例報告をしたい。
- ・報告された活動があることを知ってはいたが、どんな思いでされているのかなど初めて聞くことで、より理解できた。
- ・自分の活動の中で、思ってもいなかった課題を引き出せてもらった。
- ・このような集まりはほかにもいくつか存在し、参加したことがあるが、今回の「あきしま会議」をそれらと比較すると以下の2点の特徴がある。
 - ①昭島市民に絞っていること。また昭島市内の活動であること。
昭島市を盛り上げたい目的で活動をしており、昭島市民の方々とともに話をし、反応を見ながら進めることが重要だとの気付きがあった。
 - ②行政側の市の教育委員会が主催されていること。
ほかの同様の企画にはできない、各活動に関係する市の行政部門の方との交流や連携が生まれ、市の繁栄につながる可能性を感じた。

社会教育委員会議では、このあきしま会議を主催者側として次の4点から振り返った。

(1) 捉える

- ・「知らないうちにニーズに応じている」という組織もあるということを知ることが重要だと思った。
- ・関係者の中から口コミで広がっていく中で、足りない部分を補っているという「ニーズの応え方」があることを知った。
- ・自分たちの活動を報告したい、あるいは、人の活動の話を聞いてみたいという声が多かった。
- ・団体の孤立というものをすごく感じた。どの団体も一生懸命やっている中で、団体としてまとまるがゆえに、その中だけで悩みを抱え込んでしまっている。同じような活動団体との「情報の交換」ができていないことがわかった。

(2) 活かす

- ・たまたま話題に出たAバスの話が、不便ということで片づけられず、事業の開催時間をAバスの到着時刻に合わせてはどうかという「新たなアイディア」を聞くことができた。
- ・このような場で、多くの情報を得ることができた。「つながり」にも通ずるが、今回得られた情報を「必要な人に届けたい」という気持ちになった。

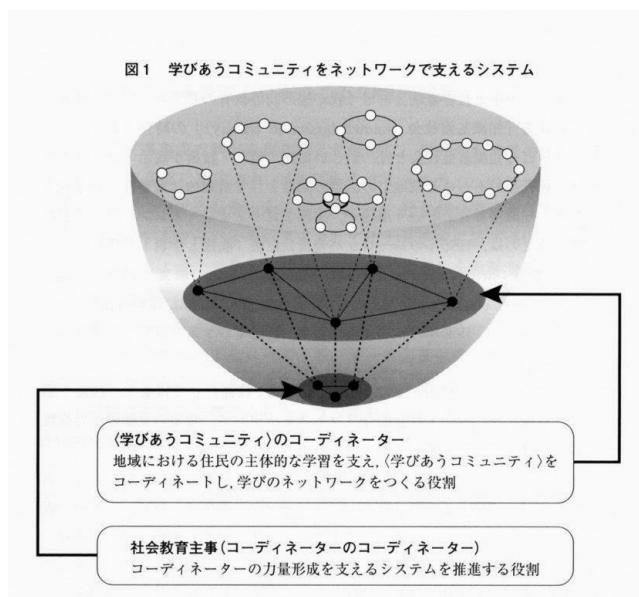
(3) つなげる

- ・実談を聞いたことで、いろいろな人と関わっている人がいると知った。また、活動に関わることによって、思わぬ波及効果が生じていることもわかった。
- ・市民が楽しく学ぶ機会を単に提供するだけでなく、意図的につないでいく仕組みづくりが必要なのだと感じた。一方で、団体によっては、他者と交わる接点を求めているわけではないことも感じた。あえて望んでいない者どうしを意図的につないでいこうというのが推進計画の目標なのだと感じた。
- ・市民が楽しく学ぶ機会を単に提供するだけでなく、意図的につないでいく仕組みづくりが必要なのだと感じた。
- ・教育コーディネーターという言葉がグループの中で出てきたが、そのような存在(コーディネーター)こそが、今回のあきしま会議で得た情報を必要と思われる人につなぐことができるのではないかと感じた。そのために、あきしま会議の参加者は、市の職員も含め多様な人であることが望ましい。
- ・口コミが最大のチラシ(情報提供)。つながる力があると感じた。

(4) 学び合うコミュニティ

- ・あきしま会議で、近藤牧子氏からお話しいただいた「学び合うコミュニティ」の話が非常にわかりやすかった（図1）

図1



「学びあうコミュニティを培う」
日本社会教育学会編(2009) P.22より

近藤氏から示された図では、参加者の普段の活動が一番上の層であり、今回のあきしま会議は、真ん中の層にあたる。つまり、活動をしている人たちが集い、領域を超えたネットワークを形成することで互いの活動を支え合う場になっているということである。一番下の層は、上の2つの層をさらに支える層であり、ここが社会教育や市民活動を支える人たち（職員や我々社会教育委員など）による重要な層であると理解した。

今回の会議は、近藤氏との事前打ち合わせにより、「何のための」「誰のための」場なのかについて明確にすることで、社会教育委員と社会教育課が一体となってその場を支えることができた。そして、実際に事業を運営する側としての主体性、場の俯瞰力、状況の多角的見方など、市民の声に共感的に寄り添い、その意味を分析するために必要な力量を獲得することもできた。さらに、実際に活動者の声やそれに対する声などを聴き、さまざまな観点から情報を共有し、分析をすすめることができた。参加者においても、自己の活動を振り返り、今後の活動のヒントを得ることができた。

これらをまとめると、あきしま会議は次のような場であったと言える。

- ① 市民の声を直接聞く場（捉える）
- ② 意見やアイデアを具現化に導く場（活かす）
- ③ つながりの醸成と情報発信の場（つなげる）
- ④ 支える側のネットワークと力量形成の場

以上のことから、あきしま会議は第2次推進計画の実現に向けて、社会教育委員会が行うべき有効な手段であるという認識に至った。

第5 後期に向けた取組みについて～捉える、活かす、つなげるための提言～

第2次推進計画の後期の取組みに向けた評価（前記第3）、茨城県ひたちなか市への視察研修（前記4の1）、そして、社会教育委員会が開催した「あきしま会議」（前記第4の2）の結果を踏まえ、後記に向けた取組みとして次のことを提言する。

1. 捉える、活かす、つなげるための提言

(1) 「捉える」ことについて

市民のニーズを広く収集する取組みを行うこと。

ニーズの収集にあたっては、市民意識調査を活用することはもとより、生涯学習に携わる個人に限らず市民団体等の声を直接聴く場を設けるなど、市民ニーズの収集方法について工夫すること。また、収集した市民ニーズは、市役所組織内で共有するなどして、情報分析に活用すること。

市民や市民団体等の声を聴く際には、後記2で提案する「あきしま会議」を活用するなどして、地域の持続可能な発展を担う人々を支えるためにはどのようなニーズや可能性があるかを掘り起こすことも重要である。

(2) 「活かす」ことについて

事業の目的等を明確にし、その上で参加者を募集すること。

単に表面的なニーズに応えるだけでなく、事業の目的が達成されるように市民の意見を活かすこと。また、その後につづく市民の活動を支えるための仕組みづくりにつなげていくこと。

市民や市民団体の声を活かす際には、事業等の内容を検討するだけでなく、「おわりに」で記載しているように、本来の目標を達成するため、地域活動等を支える仕組みや制度についても横断的に検討をする必要がある。

また、子どもを学校教育の場に預けている保護者の学びに関しては、子どもと一緒に取り組むことにより活動しやすい傾向が見られたので参考にされたい。

(3) 「つなげる」 ことについて

個人の学びが充実するだけでは、第2次推進計画の目的が期待している「つながり」には発展しないので、つながりを創る（活かす）ための方策が必要である。

個人同士のつながりを創出することはもとより、個人と団体、団体と団体の連携が図られることにより、新たなつながりが生まれることが期待される。

2. 新たな取組みについて

第2次推進計画の基本目標である「市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習」を推進するためには、多様な人々が出会い、学びあうことを軸とする社会教育の力がそれを支えると考ええる。

あきしま会議では、

- ① 参加した団体の活動内容を知っておくことで、必要としている人をつなげることができる。
- ② ニーズに応えられる
- ③ ニーズ（捉える）や市民相互がつながることができる
など、発展的な意見が多く寄せられた。

このようなことから、「あきしま会議」は、市民の主体性を尊重しつつ、社会教育委員会議が大切な視点として位置づけた「捉える」「活かす」「つなげる」場として、今後も大いに期待できるものである。

そこで、以下の4点を主目的として、「あきしま会議」を社会教育委員の一つの活動として社会教育関係委員や他部署の職員の参加を促し、継続して開催することを推奨する。

- ① 市民の声を直接聴く場とする
- ② 市民との連携を模索し、市民ニーズを活かす場とする
- ③ 市民活動を支えるためのコーディネーターの研修の場とする
- ④ 参加者自身が、個人と個人、個人と市民団体などをつなげるコーディネーター的な役割が持てるように働きかける場とする

おわりに

昭島市が推進している「ともにつくる 未来につなぐ 元気都市 あきしま」を目指した生涯学習は、個人が楽しく学び、その「学び」の継続から「まちづくり」への発展を期待するものである。

「誰もが、自分の意志で自由に学ぶことができる環境が整い、地域のつながりときずなを実感し、豊かな人生をおくることができる」ように、我々社会教育委員も取り組んでいるところであるが、本建議の第5「後期に向けた取組み」に記載したように、視点を「捉える」「活かす」「つなげる」に絞って行った今回の調査・研究をとおして、問題解決のヒントを得ることができた。

しかし、第3の「第2次推進計画の後期に向けた取組みの評価」で取りまとめたように、個人の学びを支援する上での、市民ニーズ・市民の声を十分に聴き取ってはいない状況や、聴き取った市民の声が十分に活用されていない状況がみられた。

昭島市は、生涯学習をとおして「まちづくり」に発展していくことを期待している。生涯学習は「まちづくり」のためのツールの一つであり、そのツールを使って市民相互と地域のつながりを作ることが主目標（目的）であり、生涯学習をすることではないように思う。根底にある理念は、やはり「まちづくり」であろう。

これらのことから今後、市民、地域、行政が生涯学習というツールをどのようにうまく使いこなすかということが、ひとつの課題でもある。このことについて、我々社会教育委員は、「あきしま会議」を一つの解決策として提案した。

この建議が、昭島市の生涯学習の推進に寄与し、「まちづくり」に活かされることを期待する。

1 第29期 昭島市社会教育委員名簿

議長	長瀬	高志
副議長	谷部	憲一
委員	西尾	克人
〃	並木	浩子
〃	佐藤	三男
〃	稲垣	克康
〃	松本	智子
〃	二ノ宮	リムさち
〃	中村	和喜
〃	吉村	薫

2 審議日程

第 1 回	平成 29 年	3 月 27 日
第 2 回	平成 29 年	4 月 21 日
第 3 回	平成 29 年	5 月 22 日
第 4 回	平成 29 年	6 月 19 日
第 5 回	平成 29 年	7 月 26 日
第 6 回	平成 29 年	8 月 28 日
第 7 回	平成 29 年	9 月 26 日
第 8 回	平成 29 年	10 月 23 日
第 9 回	平成 29 年	11 月 24 日
第 10 回	平成 29 年	12 月 18 日
第 11 回	平成 30 年	1 月 29 日
第 12 回	平成 30 年	2 月 22 日
第 13 回	平成 30 年	3 月 22 日
第 14 回	平成 30 年	4 月 26 日
第 15 回	平成 30 年	5 月 24 日
第 16 回	平成 30 年	6 月 28 日
第 17 回	平成 30 年	7 月 19 日
第 18 回	平成 30 年	8 月 23 日

参考資料

- 資料 1 あきしま学びぷらん(第 2 次昭島市生涯学習推進計画) 後期の取組みに係る調査シート まとめ
- 資料 2 市民のニーズを活かす・つなげる あきしま会議実施報告書

市民相互と地域のつながりを育てる生涯学習を
推進するための社会教育の役割

建議

平成30年9月20日

昭島市社会教育委員会議

発行：昭島市教育委員会事務局生涯学習部社会教育課

〒196-8511 東京都昭島市田中町 1-17-1

電話 042-544-5111（内線 2252）